ラーキンにとっての悲しい家とモニカ・ジョーンズ

高　野　正　夫

(1)

詩人や作家に対する読者の興味は、主にその作品を読むことによって沸いてくる。個々の作品に描かれたそれぞれの独自の世界観や人生観、そして様々な種類の人間に対する彼らの鋭い慧眼や深い洞察力の見事さに感動する。読者が平凡な日々の暮らしの中で身近なものとして見過ごしてしまっている多くの事がらに潜む人生の真実を、それぞれの巧みな独特な言葉によって気づかせてくれるのであろう。自らの心と体で味わった辛い厳しい経験や挫折は、漠然とした感覚としては誰でもが理解しているものであるが、それを分かりやすい心に響く言葉で表現してくれる詩人や作家に出会う時、われわれは、彼らに対する強い称賛の気持ちを抱かずにはいられない。もちろん、人生には悲しい暗い要素だけでなく、それとは正反対の、爽やかな日差しに包まれた朝の風景に象徴される心浮き浮きするような喜びや幸せも潜んでいるわけであるが、いわゆる人間の様々な感情の襞を読者に代わって表現してくれる彼らは、時には読者や一般大衆の強い憧れの対象となるのであろう。

そして、彼らに対する憧憬の気持ちがさらに昇華して、神秘的な近寄り難いものとして偶像化される時、詩人や作家は普通の人々とは異なった特別な存在として見なされてしまう。このような傾向は、イギリス・ロマン派の詩人たちが輩出した１８世紀末から１９世紀初めにかけても現れたが、いつの時代においても、詩人や作家を偶像の対象として扱う風潮は決して止むことはないであろう。彼らもわれわれ普通の人間とまったく同じ人間でありなが

ら、普通の人間にはない特別な才能や不思議な能力を持つ時、彼らは特別な存在となる。

このような一種の偶像崇拝の対象として称賛された詩人や作家は、イギリス文学の歴史においても数限りなく現れては消えていったが、イギリス現代詩においてもその典型的な例としてあげられるのがフィリップ・ラーキンであろう。最後の詩集『高窓』によって国家的な記念碑と呼ばれるほどの名声を得たラーキンではあったが、死後出されたアンドルー・モーションの『ラーキン伝』によってその評価は激変してしまう。モーションによるラーキンの赤裸々な私生活の暴露は、多くの批評家だけでなく、素朴な読者をも混乱させていた。ラーキンの詩人としての存在意義や作品そのものに対する評価は脇に置かれて、彼の歪曲した人間性や多くの女性遍歴や、人種差別的な発言のみに批判の言葉が集中してしまったのである。

ほとんどの読者や批評家が抱いていた生前のラーキンに対する神秘的で爽やかな清潔なイメージと、それとはまったく対照的な乱れた私生活に代表される汚れたイメージとの乖離によって生ずる人間性の矛盾を目の当たりにすれば、ラーキンに対する強い否定的な嫌悪感や批判は、きわめて当然な反応と言える。しかし、ある意味では、二律背反的とも思われかねないその人間性に見られる二面性は、程度の差はあれ、人間誰しもが持っているものであり、ことさらにその部分のみを取り上げてラーキンの人間性を不誠実で不正直なものとし、作品そのものの価値をもすべて否定してしまうのも行き過ぎではないかと思われる。

このようなラーキンに対する強い批判の声がある一方で、従来通りにその透明なラーキニスクの世界に心の安らぎや癒やしを素直に感じる読者も多くいる。非公式の桂冠詩人と言われる公人となったラーキンのような、幾多の賞やメダル、そして勲章など、まさに称賛の嵐とも言うべき名誉や名声を手にした詩人に対して、われわれが清廉潔白で清潔な、われわれの模範となるような人間性を求めるのは、まったく普通の反応であろう。要するに、ラーキンを正当に評価する際に最も必要なことは、その清濁を率直に併せ呑むよ

うな寛大な批評精神であろう。ラーキンに対する二つの正反対の評価は今なお続いているわけであるが、その作品や人間的な特質を肯定的に評価しようとする読者や批評家にとって、彼の独特なラーキニスクの世界は、いぜんとして不思議で神秘的な、しかし、人間的な温かさに溢れている。

ラーキンはモーションの『ラーキン伝』によって神秘のヴェールを剥がされて普通の人間となってしまったわけであるが、われわれ多くの読者にとっては、思いがけない詩人としての私生活の公開によって、さらに人間としての彼の魅力に迫ることができるのであろう。そして、個々の作品に秘められた多くの詩人の思いや複雑な人間関係などを垣間見ることによって、その理解が進むのである。作品そのものに対する興味、そして私生活そのものに対する好奇心、読者としてはこの双方の要素を抱きながら詩人の作品を読むことによって、詩人の本質的な側面に触れることができる。そのような意味でもラーキンの個人的な生活の風景が、『ラーキン伝』によってきわめて詳細に解き明かされたことは、ラーキン詩の歴史的な批評の発展に大きく貢献したわけであるが、２００１年２月にラーキンの長年の恋人であったモニカ・ジョーンズが亡くなった時にも、ラーキンの私生活の様々な側面が明らかになった。

(2)

ラーキンが運命の女とも言えるモニカ・ジョーンズに最初に出会ったのは１９４６年であった。それは奇しくもラーキンが、レスター大学の図書館に副司書として勤め始めた年であり、また同時に、同じオックスフォード大学のセント・ヒューズ・コレッジ出のモニカがレスター大学英文科のレクチャラーに着任した年でもあった。ラーキンがベルファストのクィーンズ・コレッジに移る直前の１９５０年には、二人は恋人の関係になっていたが、まるで運命の糸に導かれるように、ラーキンが亡くなる１９８５年１２月まで二人の関係は続いていた。

恋多き詩人であったラーキンが生前に出した四冊の詩集の中で、唯一献呈の辞を載せたのが１９５５年に出した『欺かれること少ない者』であり、その相手はモニカ・ジョーンズであった。モニカとの関係を公にするという大胆な行為からも分かるように、ラーキンにとってモニカは自らの人生に決して欠かすことのできない存在であり、自らの詩神の一人であった。そして、堅い愛の絆で結ばれた二人の関係は、アンドルー・モーションが「彼の人生の中でも最も重要な関係」[1]と呼んだように、決して途切れることなく続いていった。

モニカ・ジョーンズについては、往々にしてラーキンの恋人の一人であったという簡単な説明で片付けられることが多いようであるが、ラーキンの詩作に強い影響を与えたという意味では、彼の人生においては母親のエヴァ以上に重要な位置を占めていると言える。ジョン・サザーランドは『ガーディアン』紙に載せたモニカへの死亡記事（２００１年３月１５日）で、「彼女は二つの理由で記念に値する。彼女は英国の最も称賛された戦後詩人、フィリップ・ラーキンの生涯を通じての友人であり助力者（時には詩神）であった。彼女はまた独自のスタイルで傑出した教師でもあった」と述べているように、彼女には、英文学の優れた教師という知的な一面もあったのだった。オックスフォードのセント・ジョンズ・コレッジで英語・英文学を専攻したラーキンにとっては、彼女はある意味では、同じ対等の立場で英文学を拠り所にして色々と語り合える唯一の知的な女性であった。

また、「人は、モニカは、ウールワースの売り場の店員というよりもむしろ監督のようなところがあると感じる」[2]とアラン・ベネットが言うように、彼女には、外見からもそう見られるのだが、メガネをかけた厳格な女性の教師というイメージが付きまとっていた。このような彼女の個性的な性格は、ラーキンの親友キングズリー・エイミスの『ラッキージム』においては、非常に神経質なマーガレット・ピールという登場人物として多少意地悪な描き方をされている。さらに、モニカの教え子の一人である、マルカム・ブラッドベリーは、『人を食べるのは間違いだ』の中で、ドクター・ヴァイオラ・メ

イスフィールドという「いつも抗議ばかりしている」[3]頑固な女性をモニカをモデルに登場させている。イギリスの現代作家にも強い印象を与えたモニカは、ラーキンにとっては、優しい恋人であるばかりでなく、実際に詩作の源となったり、また、時には詩作に際しても具体的なアドバイスを与えてくれた良き友人でもあった。

J.R.ワトソンは、『インディペンデント』紙に載せたモニカへの死亡記事（２００１年２月２４日）の中で、「ラーキンには異なった強烈さを備えた多くの愛人がいて、その複雑な自己の多くの段階や様相を反映していたが、ジョーンズとの関係は、それらすべての中でも最も長く続き、最も影響を与えたものだった」と述べ、ラーキンの後期の作品に跡付けられるモニカの影響について具体的な例を多くあげている。それによれば、１９７３年に出版されたラーキン編纂の『オックスフォード版二十世紀詩集』では、彼女自身の文学的な考え方や、詩人たちに対する好みがラーキンに伝えられ、モニカが嫌った W.B.イェイツよりもムーヴメント派の詩人やハーディが多く取り上げられたのだった。また同じ記事で、「ポール・スコット（ラーキンは、１９７７年に『居続ける』に賞を与えたブッカー賞選考委員会の議長であった)、バーバラ・ピム、ベッチマン、ハーディそして、ギャヴィン・ユーアトのような同時代の作家に対するラーキンの愛着もすべて、モニカ・ジョーンズと共有し、恐らくは彼女によって形作られたのだろう」とワトソンは、ラーキンに及ぼした彼女の文学的な影響の強さを指摘している。

さらに私生活においても、ラーキンは、週末にはラフバラーにいた母親エヴァに会う時の行き帰りに、レスターのモニカの家に立ち寄り、そして、１９６１年に彼女がヘクサムのヘイドン・ブリッジに購入した小さな家では、二人で休暇を過ごし、そこからスコットランドへ旅行に出かけていた。ラーキンが、コールドストリームで、England の標識に坐っているのを写した有名な写真もモニカが撮ったものだった。クリケットが大好きだった二人はクリケットの試合にもよく出かけ、特に、一年に一度のローズのテスト・マッチへは小旅行を兼ねて決して欠かすことなく出かけるのだった。二人が出か

けた１９７３年のベリンガムの農業品評会からは、ラーキンの後期の名作の一つ「品評会の土曜日」が生まれ、その他にも、アレンデイルの新年の「タール樽祭」のような地元の新年を祝う行事にも一緒に出かけたりして休暇を楽しんでいた。また、最後の詩集『高窓』の巻尾を飾る「爆発」も、ラーキンがヘイドン・ブリッジにいた時にラジオで聞いたトミー・アームストロングの詩「トリムドン・グレンジの惨事」のレコードが、きっかけとなって生まれ、１８８３年２月１６日に起きたあの歴史的な炭鉱爆発で亡くなった犠牲者や残された家族への哀悼の意を込める作品となっていたのだった。

このような公私にわたるモニカとの親密な関係は、決してラーキンが望むことのなかった結婚という形を取ることなく最後まで続いたのであるが、二人の関係が途切れることなく長続きしたのは、やはり、サザーランドも『ガーディアン』紙の記事で言っているように、「モニカはフィリップに対しては頑固なほど忠実であった」という彼女のラーキンに対する強い変わらぬ愛の思いがあったからなのであろう。ベルファスト時代にはラーキンが人妻、パトリシア・ストラングと深い仲になり、彼女は一時はラーキンの子供を身篭るが流産してしまうような状況にもモニカは耐えていた。モニカとは対照的に、多くの女性との遍歴を重ねるラーキンを優しく冷静に見守る彼女の包容力は並大抵のものではないが、その根底には自立する女性としての揺るぎない自信があるのであろう。ラーキンは自らのわがままな性格を、そしてその性格故に結婚には向かないと、幾つかの詩において語り手を通して明言しているが、きわめて利己主義的でわがままなラーキンを、大きな母のような包容力でいつでも見守ってくれたのがモニカであった。そして、彼女はラーキンがいつでも戻って行ける場所を用意していてくれたのである。

事実上の配偶者とも言えるモニカに捧げてラーキンは、「オックスフォードについての詩：モニカのために」という作品を書いている。恐らく１９７０年頃に書かれたこの詩の中で、ラーキンは、大学時代の若き日々を思い起こしながら、最後の第三連で次のように二人の関係について触れている。

こうして三十年が過ぎ、ケーキに並ぶ人の列や
コーヒーもまったく忘れられて、
新しい実験室で新たなオックスフォードの出身者が画期的な発見をすると、
古い校舎はきれいになり、修復され、
学生たちは、黒書などで自分たちと同じ学生について
言われたことに恥じない生き方をする。
それは、第二次大戦の真っ最中に
僕たちが読んだあの *蚤* のように、僕たちを抱きとめる。

１９７０年の冬の学期と１９７１年の春の学期にラーキンが、オックスフォードのオール・ソウルズ・コレッジに客員研究員として滞在しながら、『オックスフォード版二十世紀詩集』の編纂に懸命に取り組んでいた時に、モニカはラーキンに様々な助言や激励の言葉を与えていた。そして彼女への感謝の意を込めて、ラーキンは１９７０年のクリスマスに、彼女にオックスフォードの歴史を図入りで説明したパンフレットを贈り、その余白に書いたのがこの詩であった。

当時イギリスでは、キングズリー・エイミス、ロバート・コンクウェストやアイリス・マードックなどが、幾つかの黒書に寄稿し、１９６０年代や７０年代のイギリスの行き過ぎとも思われる進歩的な教育制度に反対していた。特に彼らは、グラマースクールに代わるコンプリヘンシブスクールの導入という労働党の新たな教育政策を攻撃し、また、当時の学生たちの座り込み抗議をイギリスの大学にはふさわしくないものとして強く批判していた。詩の結末でラーキンは、彼らの主張に一見呼応するように多少皮肉まじりに学生たちの行動を描きながら、自らの政治的な立場を表明すると共にモニカとの深い関係についても、特別に“that *Fleae*”という言葉で触れている。

「それは、第二次大戦の真っ最中に/僕たちが読んだあの *蚤*のように僕たちを抱きとめる」と、最終の二行でラーキンが言及しているこの“that *Fleae*”

は、形而上派詩人ジョン・ダンの最も有名な詩“The Flea”を指しており、彼は事実上の妻とも言えるモニカに対して自らの変わらぬ愛を伝える意味でこの詩を捧げたのであろう。

ダンは愛する人に、この蚤の中で僕ら二人の血が混じり合っているのだと語りながら、結婚の象徴である一つの肉体となった夫婦の絆を強調していた。そして、「僕らはほとんど結婚しているようなもの／いや、それ以上だ」と告白していたが、まさにこの言葉こそ、ラーキンがモニカに伝えたかったものであった。艶めかしい恋愛の要素と知的要素を含んだダンの conceit を一つの特徴とする形而上派の詩は、ラーキンを筆頭とするムーヴメント派の詩人たちが取り入れようとしたものだが、ダンの好色的な性の隠喩を多く含んだこの詩は、ラーキンの特質の一つである卑猥な「口汚い言葉」の象徴にも一脈通じるものがある。「それは、機会詩ではあるが優しさに溢れており、彼らが『分からずに共有していた』過去を描写しながらその愛情を表現している」[4] とアンドルー・モーションも、懐かしいオックスフォードの風景に映し出された二人の成熟した愛について言及しているが、最初の出会い以来、自分に忠実に愛を捧げてくれたモニカとの絆は、ラーキンにとっては掛け替えのないものとなっていたのである。

このようにラーキンはモニカとの愛を長年にわたって育んでいったのだった。彼がモニカを最終的な恋人とした理由は幾つか考えられるが、その中でも最も確かなものは、彼女が非常に自立した女性であり、あまり多くを望まなかったということであろう。自らの両親の不幸で惨めな結婚生活から、自分は絶対に結婚しないと決めていたラーキンは、次のような多少特異な女性観を抱いていた。

> 私の女性との関係は、縮小する感受性、病的な罪悪感、密かな好色さに支配されています。女性はただじっと坐ってあなたを支援してくれません。彼女たちは子供を欲しがり、彼女たちは大騒ぎするのが好きで、彼女らは、自分たちの店に置いてあるすべての虚しい小間物類を見せび

らかす機会を欲しがっている。とりわけ、彼女らは、自分たちがあなたを所有しているのだとか、あるいは、あなたが彼女たちを所有しているのだとかいう気分になりたがるのです――それは私の大嫌いなことなのです。[5]

ラーキンは、女性に支配される結婚生活への不安や嫌悪感を率直に語っているが、このような女性に対する偏った見方は、彼に対する多くの批判の一つである性差別をふと連想させる。恐らくは、自らの多くの女性との関係からも、女性が自分との結婚を望み、子供を欲しがり、そして、強い独占欲を見せつけられていたからこそ、このような嫌悪感に満ちた性差別的な女性観を抱くようになってしまったのであろう。

しかしモニカは、独占欲や支配欲の強い女性とは違って、ラーキンが、他の女性と交際することを寛容な態度で受け入れてくれたのだった。普通の女性のようにあまり多くの感情的な要求をすることのなかったモニカのきわめて自立した性質やライフスタイルこそラ―キンにとっては、いつでも自分のすべてを曝け出して安心できる安らぎの時を与えてくれるものであったのであろう。

ラーキンが１９５５年にハル大学に移ってからもレスターに住み続け、ラーキンとの週末の逢瀬を楽しむモニカの自立した生活は、その後も変わらずに続くように思われたが、このような離れ離れの自由な生活にも一つの転機が訪れた。ラーキンがモニカに捧げた「オックスフォードについての詩」を書いてから十一年後の１９８１年の秋には、モニカは健康上の理由で、レスター大学を停年の一年前に退職することになっていた。しかしモーションが詳述しているように、[6]彼女は１９８２年の夏までロマン派詩人を教え続けていたようであるが、１９８２年の１０月にヘイドン・ブリッジの家に一人でいた時、転んで頭を切ってヘクサムの病院に収容されていた。それから翌年の３月には、ヘイドン・ブリッジでラーキンと共に復活祭の休暇を過ごしていた時に、帯状疱疹にかかり、強烈な頭痛を覚えて視力も低下したため地元

の病院に入院したのだった。しかしその後、彼女の症状はより高度な治療を必要としたため、ハルの王立病院に移っていた。

それから間もなくして、眼科医から退院の許しを得たが、モニカは弱りきって一人で自活できる状態ではなかったため、ラーキンは彼女に病状が回復したらラーキンのニューランド・パークの家で一緒に暮らそうと言い出すのだった。ラーキンとしてはあくまでも一時的な取り決めであり、元気になったら共にそれぞれの元の生活に戻るつもりでいたのだが、実際には二人は、離れることなく最後まで事実上の結婚生活を送ることになってしまうのだった。

１９８３年５月１日のジュディ・エジャトンへの手紙でも、ラーキンは、「『毎日二、三時間起きている病人なので』モニカが家にいると『とても士気がなくなってしまう』」[7]と書いていたが、病を得た彼女との共同生活はそれほど楽なものではなかったようである。詩人として生きていくためには孤独な一人暮らしが必要不可欠と考えて、それまで独身生活を通してきたラーキンであったが、自分以外に誰も頼る者がいない病気のモニカのことを思うと、ラーキンとしては、彼女を引き取って共に暮らすことが最良の選択であった。そして、モニカは、ラーキンが１９８５年の１２月に亡くなった後も二人の思い出が詰まったニューランド・パークの家に十五年以上住み続けたが、病状のせいもあり、それはまったく侘しい隠遁者のような淋しいものであった。

(3)

詩人としてのラーキンの生涯において公私にわたって大きな影響を与えたと言われるモニカ・ジョーンズが亡くなったのは今から八年前のことで、多少時期を逸した感はあるが、ラーキンがハルのピアソン・パーク３２番地の小さなフラットから移って、亡くなる最後まで住んでいたニューランド・パークの家は、２００１年２月にモニカ・ジョーンズが亡くなった後、ラーキンの姪のローズマリー・パリーに遺贈されていた。その後、主を失ったこの

大きな家は売りに出され、新しい買い手を待っていた。病を得たモニカを引き取ってラーキンは最後の二年間を、同じ屋根の下で彼女との共同生活をしたのだったが、モニカが亡くなった後に、この家の中に足を踏み入れた『デイリー・テレグラフ』紙の記者は、家の中が、ラーキンが亡くなった時のままに残されていたと同紙（２００１年１２月１日）の不動産関連の紙面（Telegraph Property）で紹介している。

『デイリー・テレグラフ』紙は、ラーキンが１９６１年から十年間ジャズレコードの評論を月に一回書いていたこともあり、またラーキン関係の記事は今でも頻繁に載せている、ラーキンとは最も関係の深い新聞であるが、この新聞記事からラーキンの生活の細かな日常風景を少し覗いてみよう。

ラーキンが多くの作品を生み出したピアソン・パークのフラットから、初めて所有した自分の家に移ったのは１９７４年の夏であるから、実質彼がこの家に住んでいたのは約十一年ほどであった。新しく売りに出すために最終的に家の中の家具や生活用品、そしてラ―キンの衣類や身の回りの所持品などすべてを片付ける前に家の中に入った記者が、最初に眼にしたのは、玄関の靴箱に置かれた五足の靴であった。靴棚には収まりきれない大きな靴で、サイズは１２（約３０.５ｃｍ）であったため、彼は靴を誂えて作っていたようである。無造作に置かれたオーソドックスな靴の写真からもラーキンの素朴で控えめな人となりが想像される。玄関のホールはきわめて広く、二階へと続く階段と小さな貯蔵室の戸がある。絨毯は赤で、壁はレモン色で、二階の踊り場まで同じ色である。ラ―キンの詩から受ける陰鬱な暗いイメージとはまったく対照的に、家の内部は非常に明るい派手な色で統一されている。

大きな洗面所の洗面器の上には、ステージで講演をしている詩人ラーキンの額入りの写真が飾られ、壁の飾り額には、『汝の神に会う覚悟を』という言葉が記されている。懐疑主義者として知られたラーキンではあったが、彼は決して神の存在を否定してはいなかったようであり、常に自らの死を見据えていた感のあるラーキンにとって、キリスト教への信仰は決して無視することのできないものであった。旧約聖書の『アモス書』第４章１２節にある

“Prepare to meet thy God”は、神の存在を否定する人々に対する警告の言葉でありまた、神への信仰の大切さを説くものであるが、これを毎朝洗面所で顔を洗いながら何気なく眼にしていたラーキンの姿を想像する時、われわれは彼の宗教に対する複雑な感情の一端を知る。

食堂と同様に居間はピンク色で、一方の壁には白い書棚が備え付けられている。パテオの扉は五面の温室に通じ広い庭が広がる。整理ダンスの上には、シャンペンのコルクが一杯の鉢が置かれ、それぞれに札が付いていて、飲んだ日の出来事と日付が几帳面に書かれている。一本は、１９７５年の CBE を授与された時のお祝いに飲んだことが、そして別なコルクの札にはただ、「モニカに、１９８４年５月７日」と書いてある。健康を損なうほどの飲酒癖のあったラーキンであったが、それぞれのコルクに付けられた札からも彼の、日々の思い出深い出来事を大切にする温かい人間性や、整理好きな細かな図書館員としての一面がうかがえる。そして、テレビの下には、ブリンモア・ジョーンズ図書館の図書請求用紙の束が置かれていた。

二階には四つの寝室があり、その三つはかなりの大きさで、紫がかったピンク色の四番目の寝室には、ラーキン自身のものと思われる数着のジャケットや、セント・マイケルのブランドのジャンパーやズボンがぶら下がっていて、ズボン吊りも付いたままである。他の寝室も同様に華やかな明るい色で、それぞれ、ライラック色、オレンジ色、そして非常に濃い藤色であった。そして記事の最後には、ラーキンが広い庭の手入れに苦労していた様子が書かれている。それは芝生におおわれた庭で、真ん中には気持ちの良い木立の空き地があり、奥には黒イチゴの茂み、成長しきった潅木や、果樹（林檎や梨の）が生えていた。

この新聞記事を見る限り、きわめて居心地の良さそうな快適な広い家であり、なぜラーキンが、新しい自分の城とも言える大きな家に移ってから、ほとんど詩作の筆を執ることがなくなってしまったのか、非常に不思議に感じられる。新しい家に移ってからのラーキンの様々な苦闘は、多くの友人への手紙に率直に記されている。一人での家の管理や掃除、そして様々な家の修

理や、機械類の故障不備の際に業者と打ち合わせをすること等、日々の暮らしの中で多くの時間が詩作以外のことに取られてしまうことを嘆いているが、このような生活の雑事に追われるラーキンは、もはや神秘的で厳かなハルの隠者ではなくきわめてありきたりの普通の独身男のように思われる。

(4)

『デイリー・テレグラフ』紙の記事から二か月ほど後には、『タイムズ』紙（２００２年２月１３日）が「書籍」（BOOKS）の紙面で４ページにわたって、『デイリー・テレグラフ』紙よりも詳細にラーキンの最後の家について特別記事を載せている。『デイリー・テレグラフ』紙が触れなかった幾つかの事柄も書かれているので、次にこの記事について紹介してみよう。

ラーキンは遺言によって、モニカが生きている間はニューランド・パークの家を彼女のものとし、モニカが最後まで住むことができるようにしてくれていた。ハル時代にラーキンが交際していた二人の恋人、ミーヴ・ブレナンやベティ・マッケレー以上に心を許した最愛のパートナーであるモニカに対するラーキンの深い愛情の表現でもあった。そして、『タイムズ』紙の記事は、売りに出されていたかつてのラーキンの家が地元出身の女性実業家、ミリアム・ポーターによって購入されたことが公にされて後に書かれたものであり、現在ではこの家は、残念ながら建物の正面が新しく改築されたため当時とは外観が変わってしまい、ラーキンがこの家に暮らした痕跡をたどることはできないであろう。

『タイムズ』紙の記事が出る一か月ほど前の『デイリー・テレグラフ』紙（２００２年１月１０日）に、「懐疑主義者ラーキンの恋人が英国国教会に１００万ポンド遺贈」という小さな記事が載っていて、モニカが、彼女の不動産の大部分（約１００万ポンド）を、セントポール大聖堂、ダーラム大聖堂、ヘクサム寺院に遺贈したことが書かれていた。モニカは、さらに大きな金額をナショナル・トラストにも残したようであった。そして、その

四日後に同じ『テレグラフ』紙（２００２年１月１４日）の「ポエツ・コーナー」という小さな記事に、ラーキンが、亡くなった恋人のモニカ・ジョーンズの遺言を通して英国国教会に約１００万ポンドを寄付したという事実と共に、ラーキンの『醜い小さなモダンな家』がハル大学によって購入の予定となった、ということも併せて記されていた。

ハル大学はラーキンの家を購入して、ラーキンの所持品を展示したり、また、「大学に居住する作家」に家の一部を提供するつもりであった。しかし、残念なことに、大学は購入資金を調達できずに、実際は、この家は売値（１６万５,０００ポンド）以下の値段で「ラ―キンのことは何も知らない」女性実業家によって買われてしまったようである。

ラーキンがかつて住んでいたニューランド・パークは、ハル大学の反対側にある、裕福な人々の住む地域で、「大学教授や銀行の支配人、そして市議会議員の住む場所」[8]とされている。ラーキンがなぜこのような「ハルのメイフェアー」とも呼ばれるような場所に家を購入したのかは一種の謎である。最初の『テレグラフ』紙の記事でも、「詩人にとっては最も考えられない家である」[9]と書かれている。ニューランド・パークにある家の中でも、ラーキンの家は一番ひどい家と言われながらも、このような裕福な人々の住む通りに、五十二歳の図書館員であるラーキンが果たして住む必要があったのであろうか。もちろん、ラーキンがこの新しい大きな家に引っ越す直前の、１９７４年６月に『高窓』が出版されたことを考えると、著名な詩人としての社会的な立場としては、このような立派な家がふさわしいと思ったのであろうか。この他にも彼がこの家を購入した理由としては、記事にもあるように、多分大学に近いということもあげられる。実務能力のあったラーキンにとって歩いて大学に行けるということもその理由の一つかもしれないが、いずれにしても独身の図書館員・詩人が住むには大きすぎる豪華な家と言える。そして皮肉なことに、このことがラーキンのこの家での長い日々を苦しめる原因ともなるのである。

さて、ラーキンの読者や批評家にとって、その作品の理解に最も不可欠な

ものの一つは彼の私生活であろうが、『タイムズ』紙の特集記事でもラーキンが最後まで住んでいた家の中の様子がきわめて詳しく報じられている。

「伝えられるところによれば、ラーキンのツィードのジャケットさえも椅子の背にかかっていた」[10]と言われるほど、モニカは、家の多くのものをラーキンが死んだ時のままにしていたのだった。ラーキンが亡くなる前の二年とその後の十三年という、長い歳月をこの大きな家で暮らした彼女の思いはどのようなものであったのであろうか。ある意味では、「事実上、隠者（recluse）として」過ごしていたわけであるが、体の自由が利かない病気であったという彼女の状況を考えると、ラーキンが亡くなった時のままにこの家で暮らすことは当然の成り行きであったのかもしれない。彼女が病に冒されなければ、恋多き詩人、生涯自らが愛したラーキンのことを思い、その思い出に浸りながら幸せに、そして自由に生きることもできたであろうが、実際に彼女の状況がどのようなものであったかは知る由もない。

先にも述べたように、モニカ・ジョーンズは財産を英国国教会とナショナル・トラストの四者の受益者に分割して残したのだが、家に残された書類は、ラーキンの本、レコード、カセット、写真、勲章やメダルを含めて、オックスフォード大学のボドリアン図書館に寄贈され、将来は公開される予定である。そして、残されたモニカが“residue”と呼んだ他の物は受益者が処分することになった。最終的には、この残りの物をハル大学にあるラーキン協会が３，５００ポンドで購入していた。ラーキン協会は２５５の品目をリストに載せていたが、その中には、ラーキンの補聴器や空の紳士用調味料の鉢、靴下や父親シドニーの下着の入ったカバンなどがあった。さらに、『タイムズ』紙の記事では四品のラーキンの所有物が大きな写真入りで特記されている。

一つ目は、一群のビアトリクス・ポターの磁器の彫像である。ラーキンはウサギが特に好きだったようで、モニカと一緒に『艶めかしいウサギ語』[11]を考案してお互いに使い合っていた。ラーキンの子供時代の好きな持ち物がウサギの縫いぐるみであったのだが、彼は成長してもウサギへの素直な愛着

は持ち続けていた。世界中の子供たちのみならず大人たちにも今なお読み継がれているピーターラビットの魅力にラーキンも引き込まれていたことが分かる。様々な無垢な動物が登場するビアトリクス・ポターの作品はきわめて教訓的な結末で終わるものが多いが、その無邪気で素朴な、そして時には悪賢い動物たちが生み出す純粋な気持ちは、詩人としてのラーキンが憧れたものであったのだろう。

次にヒトラーの彫像である。コヴェントリー市の収入役をしていたラーキンの父親シドニーは、三十年代に子供のラーキンをドイツに連れて行くほどのヒトラーの崇拝者であり、コヴェントリーの自宅の炉棚にその小さな彫像を飾っていた。なぜラーキンがこれを手元に置いていたのかは大きな謎であるが、恐らくは、父親の数少ない形見の品であったからこそ、亡くなるまで取って置いたのだろう。ラーキンは自らの子供時代を「忘れられた退屈なもの」と呼び、何かいまわしい思い出したくないものとして表現することが多かった。そして、父親シドニーと母親エヴァの家庭生活は非常に惨めな不幸なものであるという印象を与えてきた。

そしてどちらかと言えば、父親よりも母親エヴァとの絆を大切にして人生を生きていたようであり、父親シドニーとの関係は幾分疎遠なものと思われていた。しかし、父親の死を歌った作品「四月の日曜日に雪が降ると」においても、父親の喪失への辛い思いを熱くうたっていたように、ラーキンは父親に対する愛の気持ちは決して忘れることはなかった。ヒトラーの彫像以外にも、ラーキンは父の形見の品の一つであるシドニーの懐中時計を常に身に付けていたというエピソードからも分かるように、ラーキンの父親への思いは、われわれが想像する以上に強かったのであろう。

三つ目の品物は、六，七冊の青いリング・バインダーで、表には“Staff Handbook”と黒い字で書かれている。そのうちの一冊の内側には、首から上が引き裂かれた女性の露出した胸の写真が張ってあり、ラーキンのポルノ趣味の一面を示すものである。この記事でインタビューを受けたハル大学のジェイムズ・ブース教授は、「ラーキンは、これらのバインダーにポルノ写真を

しまって題名の『ハンドブック』の二重の意味を楽しんでいたのかもしれないと思う」[12]と述べたようであるが、実際にこのようなマニアックな露骨な写真を目の当たりにすると、今さらながら、ラーキンのポルノ好きに言葉を失ってしまう。

最後に、一階のトイレの便器（のタンク）の上に張られたテッド・ヒューズの写真である。テッド・ヒューズが１９７５年５月にハル大学で講演を行った時の写真で、司会のラーキンが脇でヒューズに聞き入って真剣に見つめているものである。ラーキンがこの桂冠詩人を嫌っていたことは有名な話であるが、この記事を書いたアン・トレネマンも書いているように、「家の中の写真の位置からも分かるようにラーキンはヒューズが好きではなかった」[13]のだった。このような場所に自らのライバル詩人の写真を張ること自体かなり風変わりなことであり、人間としてのラーキンの特異な一面がのぞかれる。

さらに、この四つの品目以外に紹介されているのは、ラーキンの奇妙な趣味である。ブースの説明によれば、「ラーキンは、モニカを除いた自分の知っていたすべての女性の名前を使って、２７か２８枚の紙の上で空想のクリケットをしていた。それは、ふと思いついたようなものではなく、訂正箇所はタイプされて注意深く貼り付けられ、得点は緑のインクで記録されていた」[14]のだった。自分が過去に交際したすべての女性の顔や性質、そして彼女らとの様々な出会いや別れを懐かしく思い出しながら、空想のゲームを一人でラーキンがやっていたことを想像すると、彼のそれぞれの女性や恋人たちに対する思いがいかに強いものであったかが分かる。それと同時に、ラーキンのポルノ趣味にもどこか通じるような独特な女性観というか、独特な偏執的な人間性が強く感じられる。「それはとても悲しい形見です。彼はあの家の中に坐って、この空想の女性たちと終わりのないクリケットのゲームをしていたのでしょうか。それはとても悲しいことです。それは本当に終末的なことなのです」[15]とブースも最後に述べているように、非公式の桂冠詩人或いは国民詩人とまで言われた詩人の公の顔からはまったく想像もできないような奇妙なエピソードであろう。

『タイムズ』紙の特集記事に載ったこの五、六点の品目からさえも、今まで知られることのなかったラーキンの特異な性格の一面が推測されるが、われわれラーキンの読者としては、彼の私生活について多くのことを詳しく知れば知るほど、人間としてのラーキンがいかに不思議な人物であったかが分かってくる。詩人としてのラーキン、或いは詩の中に登場する幾つもの仮面をかぶったラーキンは、このような記事から明らかになる人間としてのラーキンとはきわめて異質の存在であることを思い知らされる。しかしながら、本質的に人間に固有の、二面性を考えると、ラーキンの虚像と実像は共に人間そして詩人としてのラーキンの真の姿なのであろう。

(5)

１９７４年の夏にラーキンがニューランド・パークの家に引っ越してから新たに書いた作品は、１９７７年の「朝の歌」と７９年の「草刈り機」と言える。亡くなる８５年までの十一年の間に他に作品は書かれなかった。厳しい言い方をすれば、詩が書けなくなったのである。新しい大きな居心地の良いはずの家に移り、いろいろな意味で異なった環境に詩的想像力を掻き立てられて、新たな作品をさらに書く時間は十分にあったはずである。年齢的にも五十二歳という最も働き盛りの時で、『高窓』に続く素晴らしい詩集を読者のみならず、多くの批評家が期待していた。

なぜラーキンが突然詩が書けなくなってしまったのか、幾つか理由は考えられるが、その一つは、ニューランド・パークの家に移ってから、家の細々とした管理や修理、そして掃除や庭の手入れなどに多くの時間を取られてしまったということが考えられる。ラーキンが新しい家に移った時の複雑な気持ちは、多くの友人への手紙に記されているが、『タイムズ』紙と『デイリー・テレグラフ』紙の双方の記事では、それらが詳しく紹介されている。

１９７４年２月１７日のジュディ・エジャトンへの手紙では、「私は、特に目立たない小さなモダンな家をニューランド・パークに買いますと、盲目的

に、耳も聞こえずに、押し黙ったまま、言ってしまった。・・・まあとにかく、それはバイパス沿いにあるバンガローではありません。でも、それは人間的な精神の高潔さをよく表しているような住居とはいえません・・・それで、ラーキンのピアソン・パークの時代は終わり、ニューランド・パークの時代が始まるのです」[16]と書いている。ラーキンが、自ら初めて購入した自分の家を好きでなかったというのは良く知られているが、それは、多くの友人に宛てた手紙にも非常に細かく記されている。この手紙でもラーキンは、「特に目立たない小さなモダンな家をニューランド・パークに買いますと、盲目的に、耳も聞こえずに、押し黙ったまま、言ってしまった」とあるように、何か不動産屋に押し切られるような形で仕方なく新しい家を買ってしまったことが推測できる。自分が本当に気に入って、買いたくて購入した家ではないからこそ、不満が残るのであろう。さらに「人間的な精神の高潔さをよく表しているような住居とは言えません」と言って購入したばかりの自分の家を貶す時の、彼の言葉からは多少の後悔の念さえも感じられる。

前年の１９７３年の１２月に突然ハル大学より、十八年間住み慣れたピアソン・パーク３２番のフラットを売却すると言われて狼狽していたラーキンにとっては、多くの傑作を生み出してくれた理想的な住居から追い出されてしまったという意識も少なからず残っており、「ラーキンのピアソン･パークの時代は終わり」を告げたことを今さらながら自分自身に納得させている。そして、新しく始まる「ニューランド・パークの時代」に対する期待の気持ちは、新たな大きな家がもたらす様々な現実的な障害や気苦労によって掻き消されてしまう。

１９７４年６月５日のバーバラ・ピムへの手紙では幾つかの具体的な不満が記されている。「裏には広大な庭があり、その側面は、公営住宅や洗濯物や子供たちと同じくらいに、隣の家に近い。絨毯を買ってペンキを塗ってもらい、他にも二、三、やってもらったが、すべてのことがかなり私を苦しめている。・・・それはひどく優雅さに欠けた家で、まったく G.K. チェスタートンなら『間違った形』と呼ぶようなもので、いかなる快適さもありません」

[17]とこの家の形のまずさに言及している。「家の正面が巨大な完璧なガレージの白い扉によって占められており、正面玄関の戸がこちら側に隠れてしまっている」[18]と、『テレグラフ』紙の記者スー・メイソンが書いているように、家の正面が大きなガレージに占領された非常に醜い家であり、それゆえラーキンも「ひどく優雅さに欠けた家」と呼んだのであろう。

移る以前から非常に多くの不満を漏らしたラーキンは、１９７４年６月２７日に新しい家に引っ越したわけであるが、その直後の７月１２日の友人の写真家フェイ・ゴドウィンへの手紙でも、新たな現実的な悩み事に触れている。「引越しはかなりひどかったし、新しい家自体が問題だらけ（玄関の戸はつっかえて、裏の戸に鍵が掛かっていないなど）ですが、すべてはそのうち落ち着くと思います。二十五年ぐらいで」[19]と、ラーキンらしく皮肉な冗談まじりに幾つかの問題を語っているが、最初の日から彼は、正面の戸から家の中に入れずに大きなガレージから出入りせざるを得なかったのである。

１９７５年４月２８日のノーマン・イルズへの手紙では、さらに深刻な詩人としての悩みに触れている。「ここでは､私の日々を終わらせることができないと本当に思います。仕事が多過ぎるのです。この家では本当に幸せではありません――書くことができません。今年は一編の詩だけで、しかも『滑稽な』詩です」[20]と、実際に詩が書けなくなった自らの深い苦悩を語るラーキンの姿はきわめて悲しいものであった。『高窓』を出版してからラーキンの名声はその頂点に達し、７５年には王立文学協会からベンソンメダルを受賞し、その年の１１月には、バッキンガム宮殿で大英帝国勲爵士（CBE）を授与されていた。まさに、名誉と名声とを手にし、そして、モニカ・ジョーンズとの愛の絆も深まって、これ以上望むべきものは何もないと言えるような幸せの頂点に達したラーキンであるが、皮肉なことに、肝心の詩的想像力は新しい家に移ると共に急激に失われてしまったのである。

１９７６年８月１４日のバーバラ･ピムへの手紙では、「湯沸かし器が止まってしまった。君にもこんなことが起こるのかどうか分からない。私には一年半か二年ごとに起こるんだ。一か月は風呂に入れないと思う」[21]と、別な

不愉快な悩みが綴られている。ピアソン・パークのフラットに住んでいた時には、所有者であるハル大学がすべての故障や設備の不具合などは直してくれたのであろうが、新しい家に移ってからはすべて自分でその対応に当たらなければならなくなってしまったのだった。

１９７７年6月１３日のアンソニー・スウェイトへの手紙では、この家でラーキンを最も苦しめたことが記されている。「ひどい庭にまた草がはびこっていて、抑えようのない葉で窓枠は無理やりにばらばらになった。畜生」[22]と、大きな庭の手入れに苦闘する自らの哀れな姿を伝えている。特に春から夏にかけては芝生や雑草の伸びが早いので頻繁に芝生などを刈らなければいけないのだが、一人身のラーキンとしては、庭師がいるとはいえ、庭の手入れがこの大きな家に移ってから最も辛い家事となるのである。

１９８０年１１月１２日のジュディ･エジャトンへの手紙では、「ちょうど家の半分（外側を）ペンキを塗ってもらったところだがひどく見えるよ」[23]と、ペンキ屋にペンキを塗ってもらっている様子を語っているが、家の外側全部にペンキを塗ってもらう作業でさえ、専門の業者に頼むわけであるが、それでさえ塗り終えるのに一か月以上かかり、その間ラーキンは幾分不自由な暮らしを余儀なくされるのである。さらに同じエジャトンへの１９８２年６月６日の手紙でも、再びペンキ塗りの作業が始まることへの不愉快な気分を述べている。ハル大学から名誉教授の称号を授与されることになったことを書いた後、「そして、明日ペンキ屋が来るんだ、三週間ほどだ。ああ困った。・・・パイプの配管を間違えて二階が手に負えない状況なので、セントラル・ヒーティングの業者も来るんだ。でも、いつかはすべてが、また静かになるだろう。でも、家具にシーツをかぶせたり、本棚を空にしたり、ペンキの嫌な臭いなど、本当にひどいことだけどまず切り抜けなくちゃならない」[24]と、自分の家に他人が入り込んで来ることを不満げに述べている。

１９８３年8月１４日のアンソニー・スウェイトへの手紙では、近づく老齢や死､そして将来への不安について書いた後、「盗難予防の錠を窓に付けてもらった。それに、シャンペンを二本飲み干した」[25]と、泥棒対策用の錠を

取り付けてもらわなければならない、大きな家での不自由な暮らしに触れている。この時期は、ハル大学を退職して悠々自適の暮らしをしているはずのラーキンであろうが、実際は、自由な想像力の迸る詩作の生活とは無縁の暮らしをしていたのだった。詩的想像力の枯渇と共に、創作への意欲を失ったラーキンは、詩が書けなくなった自らを卵を産まなくなった年老いた雌鶏と表現していた。そしてスー・メイソンも述べているように、「ニューランド・パークで、彼は詩を書く代わりに、ほとんど夜はテレビを見て、酔っ払っていたのだった」[26]。

１９８４年１１月１３日のコリン・ガナーへの手紙では、コリンが送ってくれた二人の幼い頃の写真を見ながら、昔の幼なじみの友人たちを思い出している。「白い服を着て何て僕たちは皆無邪気だったことか」[27]と懐かしそうに子供時代を振り返った後に、友人のガナーに自分の現在の暮らしぶりについて書いている。「僕は隠者のような暮らしを続けて、一人で十二時間か二十四時間かける必要がある、葉っぱが山のように積もった庭をむかつくように眺めている。僕には村の馬鹿みたいな庭師がいるが、来たいと思う時に来て、彼が主に骨折るのは、花や潅木と呼べる庭のすべてのものの破壊に専念することなんだ。もちろん、雑草は妨げられもせずよく伸びるんだよ」[28]と、自分がいつも頼んでいる庭師についての率直な不満と、庭にはびこる雑草についての絶え間ない苦労を語っている。

大きな家と庭を持ったことによっていかにラーキンが、生活の大部分の時間をその管理と手入れに当てなければならなかったかが、多くの友人への手紙に記された尽きることのない不平や不満によっても分かるのだが、さらに、ラーキンが亡くなる年の１９８５年１月１３日に書かれたジュディ・エジャトンへの手紙では、隣人とのトラブルについて詳しく言及している。最近引っ越してきた隣人の飼っている大きなグレート・デーン犬が、自分の庭に入って来て困ると、どこにも遣りようのない悩みを吐露している。隣人に犬のことを言い塀を設けてもらったが、今朝降った雪には犬の足跡が付いていて、あんな風に大きな犬は何でも通り抜けてしまうと、隣人への不満を口にし、

この隣人を「育ちの良くない人たち」と強く貶している。ラーキンの隣人とのトラブルについては他にも、彼は庭のことで、ラーキンの家の庭と裏が接していた、幾人かの修道女と奇妙な論争に巻き込まれたことがあるとスー・メイソンは書いている。そして、育ちの良くない人だと大きな犬を飼っている隣人について憤慨の言葉を述べた後、彼は、「この地域も質が悪くなってきた。半分の家々は商売用のライトバンを外に停めている。二重窓や新しい台所を取り付けてもらっているからではなくて、車の持ち主がそこに住んでいるからなんだ。ひどいよ」[29]と、車を車庫に入れずに自分の家の前に停めておく隣人たちの質の低下やマナーの悪さを、まるで小姑のように不満たらたらと述べている。

このように、ラーキンの友人への手紙に記されたニューランド・パークの新しい家での彼の悩み事が示しているように、彼は、詩が書けなくなった理由として、この家に関わる多くの日常的な雑事をあげている。隣人とのトラブルや庭の手入れやその他の細々とした事柄にも、また、１９８３年にモニカが同じ家に住み始めてからは病気の彼女の世話にも当たらなければならなくなったのであり、まさに、この新しい家に移った時期を境にして、ラーキンの創作への意欲はまったく削がれてしまったのだった。詩人や作家にとって、作品を生み出すための環境は、敢えて言えば快適な居心地の良い静かなものが理想であろうが、本当に創作の情熱や意欲に溢れた詩人ならば、どのように劣悪な環境においても作品は生まれるはずである。

ある意味では、ラーキンは自らの詩的想像力の枯渇や創作意欲の衰えを自らを取り巻く環境の変化に起因しているが、実際には彼自身の内面から「自然に溢れ出る力強い感情の迸り」がなくなってしまったからなのであろう。どのような詩人にとっても悲しいことであるが、すべての詩人が機械のように永遠に詩を生み出し続けられるというわけではない。その生命が必ず死を迎えるように、詩人の想像の泉もいつかは渇く時が来るのであろうか。

ラーキンの友人たちへの手紙に記されたニューランド・パークの新しい家についてのラーキンの思いは、そのどれもが彼の悲観的な人生観や陰鬱な性

格を彷彿させるように、否定的である。作家のバーバラ・ピムに宛てたラーキンの言葉（１９７４年６月５日）が、この家に対する彼の正直な印象を物語っている。“I have bought an ugly little house, fearfully dear in a bourgeois area near the university.”[30]とピムに語る時、彼には自分自身の家をブルジョワ階級の地域に買ったのだという喜びはほんのひとかけらもない。「恐ろしいほど高価な、醜い小さな家」と、いつものように控えめに表現してはいるが、彼自身は、実際には最初からこの家が気に入らなかったのであろうし、そして最後までそうであったのだろう。

(6)

さて、ニューランド・パークの「ひどく優雅さに欠けた家」に対するラーキンの思いは、否定的なものばかりが目立つわけであるが、「家」という主題に関して、ラーキンは、「出発の詩」でも、「われわれは皆家が嫌いだ。／そしてそこに居なければならないことも」と述べ、ある日突然すべてを投げ出し、家族を捨てて家を出て行ってしまった「あいつ」に代わって、率直に家に対する嫌悪の気持ちを露わにしている。「土地と恋人」においても、「ここは私にとって打って付けの土地だ／ここに留まろう／と言える場所には／出くわしたことがない」と言って、自らの土地や場所への「帰属意識の希薄さ」[31] を明確にしている。また、新しい家にラーキンが引っ越す十年ほど前に書かれた“Home is so sad”においても家というものに押し込められた人間の悲しみを語っている。

家とはあまりに淋しいもの。家族を取り戻そうとするかのように、
最後に出て行った人のくつろいだ気分に合わせて、
放っておかれたまま。それどころか、
喜ばせる家族の誰をも失って、ひどく萎れていく。
盗みを追い払う気も、

元通りの家に再び戻る気もなく、
物のあるべき姿を推測するのは楽しいが、
長い間すっかり倒れたまま。この家が昔どんな様子だったか分かるでしょう。
絵やナイフやフォーク類をご覧なさい。
ピアノの椅子の上の楽譜。あの花瓶を。

この詩は、ラフバラーに住んでいた母親の家をいつものようにクリスマスの休暇に訪れていた時に、ラーキンが感じたその家に対する印象を多少哀感の思いを込めて述べたもので、ピアソン・パークの下宿に戻った後、１９５８年１２月３１日に完成したものである。ラーキンは多くの詩の中で様々な愛の形を描写しているが、この詩も夫を亡くした未亡人である自らの母親エヴァの悲しい思いを主題としている。

家というものは、夫と妻がいて初めて成り立つものであるが、夫を亡くして一人淋しくこの家に住む母親は、ラーキンからすれば、何か夫であったシドニーへの思いに縋りながら生きているような気がしたのであろう。母親エヴァは夫を亡くした後も、ほとんどの身の回りの品物を夫が生きていた時のままに、家の中に残していたのであろう。詩の最後に一つ一つ印象的にあげられた品々、「絵やナイフやフォーク類」、「ピアノの椅子の上の楽譜。あの花瓶」はまさに、ラーキンの両親の生活を物語るものであり、それは「夫婦が共に家庭を築こうという最初の立派な意思を表している」[32]とアンドルー・モーションも述べているように、夫婦の強い絆を思い出させるものかもしれない。「しかし、『物がどうあるべきかを想像することの楽しさ』から残るすべてのものは、色褪せた希望だけなのです」[33]という、モーションのさらなる言葉は、未亡人となった母親の愛はすでに失われたのだということだけでなく、「愛したいという願望」さえも聞き入れられることなく色褪せていくのだということを暗示している。

母親の愛の虚しさを象徴する最後に淡々と描写された品々は、自らの両親

の夫婦愛がどのようなものであったかを身近にしていた息子のラーキンから見ても、悲しいものであり、「回顧」にも表現されたように、「満足のゆくもの」ではなかったのであり、そのような愛の夢も叶えられずに挫折したことを思い出と共に語りかける家だからこそ、「家とはあまりに悲しいもの」という結論が出てくるのであろう。言い換えれば、父親シドニーが亡くなった時のままに残された家は母親の挫折した愛の象徴なのであろう。「ラーキンの世界の失敗と死は、否定し難いほどに、またしばしば辛辣に、率直な注意を提示し、要求する」[34]とテリー・ウェーレンが述べているように、「家とはあまりに悲しいもの」にも一種の失敗が描かれている。それは、ラーキンの母親エヴァがその苦難の生涯において味わった愛の挫折であった。

家の中には父親シドニーのゆかりの品々も多く残されていたであろうが、夫が生きていた時のままに家の中に置かれた「絵やナイフやフォーク類」、「ピアノの椅子の上の楽譜。あの花瓶」は特に、彼女の愛の悲しみを強く思い出させるものなのであろう。そして、家を擬人化することによって、夫のいなくなった家に一人住む母親の淋しさや虚しさが効果的に一種のメタファーとして表現されている。ラーキンの陰鬱な人間観は多くの作品に反映されているわけであるが、彼がこのような悲しみや絶望や失望などの人間の個人的な感情を表現する時に、ラーキンは、それを強い剥き出しの感情で吐露するのではなく、ムーヴメント派の特徴でもある控えめな抑制された言葉で、過度に感傷的になることなく伝えようとしている。

さて、この詩にはモーションを初めとする以上のようなきわめて否定的な見方がある一方で、まったく正反対に、その肯定的な側面に注目する批評家がいることも述べる必要がある。A.T. トリーは、「実際に、『回顧』、『午後』、そして『家とはあまりに悲しいもの』のような詩にさえも、それとなく、或いはついでに表現された家族の生活に対する強い奇妙なノスタルジアがある」[35]と述べているが、このような言葉はまさに、この詩の持つ二面性を示すものであろう。つまり、最後の二行に描かれた品々をラーキンの両親が共に暮らしていた素朴な家族の生活を懐かしく思い出させるものとして詩を捉

えているのである。

また、ウェーレンは、「『家とはあまりに悲しいもの』や『ぼけ老人』のような代表的な詩では、それ（失敗や死）は、人生の価値の非常に真面目な記録を、そして、美の瞬間は、その直接的な感覚が及ばないほどの価値があるのだという苦闘する希望を、掻き立てている」[36]と述べている。この詩に表現された失敗を現実的な愛がもたらす単なる悲しみとして捉えるのではなく、人生や家族の生活の価値を肯定的に見ようとする姿勢がうかがえる。さらに、ウェーレンは、「『家とはあまりに悲しいもの』におけるように、人々の精力（エネルギー）には活力に溢れた勇気が潜んでいるのだという認識がある。つまり、話者を単純に哀れな結論、彼の悲しいペルソナが方向を変えがちな結論から救うのだという認識がある」[37]と述べ、この詩にうたい込まれた人間の逞しい勇気に言及している。

このように、この詩には、ラーキンの他の多くの詩に見られるように、正反対の解釈が成立するようであり、読者としてはいささか当惑してしまう。しかし、「家とはあまりに悲しいもの」という詩の題名を素直に受け取れば、エドナ・ロングリーが言っているように、「『家とはあまりに悲しいもの』では、家は意味を空にした、空間、家具、そして様々な人工物なのである」[38]。そして、「あの花瓶」を含めて、最後の二行に記された平凡な家族の日々を象徴する品々は、昔のままに見えるが、その強い郷愁の思いの底には、美しい花も飾られずに空の花瓶が淋しく立っているのであろう。それは、まるでいつかは一人で死んで家から立ち去って行かなければならない人間の人生の虚しさを静かに語りかけているようである。伝統的な家や家族の愛に対する敬愛の気持ちに対するラーキンのいささか皮肉っぽい感情が込められた作品であるという、結論は決して満足のゆくものではないが、二面性の詩人ラーキンを解読する時には、これも止むを得ないのかもしれない。

さて、追記になるが、ラーキンの生涯や作品に関わることで、モニカ・ジョーンズが亡くなった後に重要な出来事としてさらにもう一つのことが起き

ていた。それは、『サンデー・タイムズ』紙（２００４年１１月２１日）で、アンソニー・ガードナーが「フィリップ・ラーキン：われわれよりも長生きするものは愛である」という記事に書いているように、ラーキンが、生涯の恋人であり最も親しい相談相手であったモニカ・ジョーンズに四十年以上に渡って書き送った１,４２１通の手紙と５２１通の葉書や多くの写真などが、モニカ・ジョーンズの手元に残されていたことが明らかになり、それが遺著管理者の判断で売りに出されたことである。

この記事では、誰がこの新たなコレクションを買うのかについては未定であったが、その販売を扱ったロンドンの書店バーナード・クウォリッチの売値は２０万ポンドであった。その後、オックスフォード大学のボドリアン・ライブラリーがそれを購入し、現在、アンソニー・スウェイトが同ライブラリーと協力して、ラーキンがモニカに送った新たな書簡集をフェイバー社から出版すべく準備中であるということである。

また、ラーキンの傑作の一つである「聖霊降臨際の婚礼」が生まれるきっかけとなった、ロンドンへの列車の旅について記述した１９５７年の手紙の一部が紹介されている。さらに、チチェスターの大聖堂にモニカと一緒に訪れた時に見た、アランデル伯爵夫妻の彫像が起源となった「アランデルの墓」のタイプライターの原稿が見つかり、それと一緒に送った手紙でラーキンは、トマス・ハーディが最初の妻の近くに埋葬されることを望んでいたという話に言及しており、「愛は当然死よりも強いことになる」と書いている。「われわれよりも長生きするものは愛である」という、この詩の最も有名な最終行の言葉が誕生した背景が説明されており、また、モニカへの愛と、自己愛とも言うべき「エゴティズム」とのはざまで苦悩するラーキンのありのままの姿も描かれている。

既に周知の通り、ラーキンの私生活については、アンドルー・モーションの『ラーキン伝』や『ラーキン書簡選集』によってほとんどのことが公にされてしまった感があるが、この新たな貴重な資料の発見と出版によってさらに正確な伝記的な事実や作品の製作過程、そして、ラーキンをめぐる様々な

人間関係や赤裸々なモニカとの恋愛関係などが、明らかになることは間違いないであろう。

注

使用テクストは、*Philip Larkin: Collected Poems*, ed. Anthony Thwaite (The Marvell Press and Faber and Faber, 1988)による。

1. Andrew Motion, *Philip Larkin: A Writer's Life* (Faber and Faber,1993), p. 165.
2. Alan Bennett, ‘Alas! Deceived’ in *Philip Larkin: Contemporary Critical Essays* , ed. Stephen Regan, (Macmillan New Casebooks, 1997), p. 227.
3. Anthony Gardner,‘Philip Larkin: What will survive of us is love’, *The Sunday Times*, November 21, 2004.
4. Motion, pp. 405-6.
5. Bennett, p. 231.
6. Motion, p. 498.
7. Ibid., p. 499.
8. Ann Treneman, ‘An ugly little house’, *The Times*, Wednesday February 13 2002, p.2.
9. Sue Mason, ‘Home is so sad.　It stays as it was left…’ in *Telegraph Property*, Saturday December 1, 2001, p. 7.
10. Treneman, p. 4.
11. Ibid., p. 4.
12. Ibid., p. 4.
13. Ibid., p. 4.
14. Ibid., p. 4.
15. Ibid., p. 4.
16. Mason, p. 7.
17. Treneman, p. 2.
18. Mason, p. 7.

19. Treneman, p. 2.
20. Ibid., p. 2.
21. Ibid., p. 3.
22. Ibid., p. 3.
23. Mason, p. 7.
24. Ibid., p. 7 .
25. Treneman, p. 3.
26. Mason, p. 7.
27. *Selected Letters of Philip Larkin 1940-1985,* ed. Anthony Thwaite (Faber and Faber, 1992), p. 724.
28. Treneman, p. 3.
29. Ibid., p. 3.
30. *Selected Letters of Philip Larkin,* p. 509.
31. Steve Clark, ‘“The lost displays” : Larkin and Empire’ in *New Larkins for Old: Critical Essays*, ed. James Booth (St. Martin’s Press, 1999), p. 172.
32. Motion, p. 290.
33. Ibid., p. 290.
34. Terry Whalen, *Philip Larkin and English Poetry* (Macmillan, 1990), p. 29.
35. A. T. Tolley, *My Proper Ground: A Study of the Work of Philip Larkin and its Development* (Edinburgh U. P., 1991), pp. 195-6.
36. Whalen, p. 29.
37. Ibid., p. 108.
38. Edna Longley, ‘Larkin, Decadence and the Lyric Poem’ in *New Larkins for Old: Critical Essays*, p. 44.